

1) 西表島植物誌編纂事業 VIII

米倉浩司¹・天野正晴¹・阿部篤志¹

キーワード：西表島 植物相 植物誌編纂 データベース

1. はじめに

西表島（沖縄県八重山郡竹富町）は、その亜熱帯特有の生物相と島嶼環境がもたらす希少性から奄美大島、徳之島、沖縄島北部とともに令和3年に世界自然遺産に登録され、注目されている地域の1つである。西表島の植物相に関しては、世界遺産登録に先立ってこれまでの調査が参照され、様々な希少種が生育することが示されているが、これまでに島全体の植物相に関するまとまった報告は行われておらず、世界遺産の価値を長期にわたって保全する上で障害となっている。そこで当財団では、琉球大学、鹿児島大学などの研究機関とともに平成29年度より本事業を開始し、西表島全域の野外踏査を実施している。さらに過去に採集された西表島産標本情報を集積すべく鹿児島大学、京都大学、琉球大学、東京大学などにおいて標本調査を進めている。令和5年度に実施した現地調査及び標本調査の結果を中心に報告する。

2. 調査方法

1) 現地調査

現地調査は島全域の低地の絶滅危惧植物の生育地を中心に、開花や結実の状況に留意しつつ行った。また、令和元年度～4年度に引き続き、琉球大学のトランセクト調査へも参加した（写真-1）。採集標本は沖縄美ら島財団総合研究所の植物標本室に（トランセクト調査での採集標本は、琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設に）収蔵し、データベースに登録して管理を行った。西表研究施設の標本についても、琉球大学理学部標本室への移管とデータベース登録を行っている。

2) 標本調査

令和4年度に引き続き鹿児島大学総合研究博物館（KAG）、東京大学総合研究博物館（TI）と共同研究契約を締結し、西表島とその周辺地域（琉球・台湾）の標本の画像データベースの構築を行った。京都大学（KYO）、東北大学（TUS）においても西表島産標本のデータベース化と画像取得を行い、国立科学博物館（TNS）、米国のU.S. National Herbarium（US）、中国科学院の中国数字植物標本館（CVH）のホームページ上で公開されている画像

付き標本データベースからも西表島産の標本を抽出し、画像から同定をチェックした上でデータベースに加えた。国立科学博物館と琉球大学については、一部の群について実際に訪問してデータベース未収録の標本の追加や収録標本の同定のチェックを行った。



写真-1 現地調査状況。左 令和5年度のトランセクト調査地の一つ。右 ササの開花枯死によって環境の変化した山頂域の調査

3. 結果と今後の課題

1) 現地調査

現地調査は、令和5年9月～令和6年3月までの間の延べ18日間実施し、約256種、313点（重複標本を含まない）の標本を採集した。この間、琉大のトランセクト調査には全部で2地点参加した（トランセクト調査において採集された標本は琉大のコレクションとして扱われるため原則として上記の数字には含まれない）。

調査の結果として、今年度に記載されたばかりのイネ科の西表島固有変種イリオモテスズメノヒエの分布状況や個体数を把握したほか、低地で近年の記録のなかったいくつかの種について産地の現状を把握できた。また、過年度の採集標本や、圃場で栽培し開花した個体の詳しい調査により、従来ハガクレナガミランと混同されていた日本新産のイリオモテカヤラン（新称）が確認されたのをはじめ、これまで不確かな記録でのみ知られていたいくつかの在来種（ワラビツナギ、ホルトカズラなど）や、日本新産の外来種（シマミヅハコベ）に関する報告がなされた。

今年度も、昨年度同様に天候不順などのため、当初目的としていた未調査プロットの解消には至らなかった。その分、既調査の場所において時期を変え再訪し、補完的な調査を行うとともに開花・結実時期の確認など植物季節の解明にも努めた（図-1）。

¹植物研究室

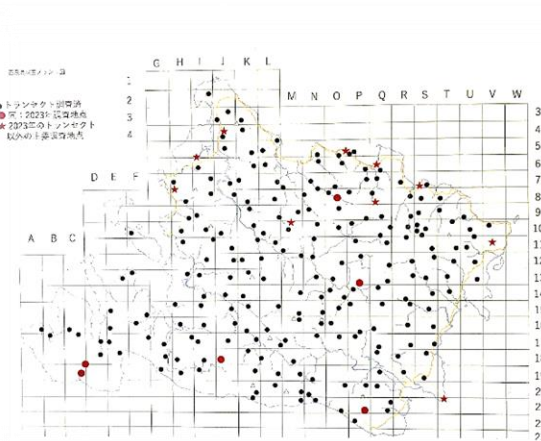


図-1 令和5年の調査状況(赤点)。トランセクト調査地は、当財団の参加しなかった地点も含む

2) 標本調査

当財団所蔵の標本の整理、貼付とデータベース化を進め、令和5年度には西表島産868点をデータベースに登録した。KAG、KYO、TI、TUS、TNSなど、国内標本庫との共同研究や、訪問してデータ取得を行った結果、西表島産標本に関してそれぞれ32点(KAG)、350点(KYO)、910点(TI)、228点(TUS)、6点(TNS)をデータベース化した。これらの個別データベースと、USやPEなどの海外標本データベース、およびWalker(1976)など文献に引用されたその他の標本の採集データをもとに、西表島産標本の産地、日付、植物名の表記の統一を図った上で統合を行い、計53381レコード(令和5年4月6日現在)からなる統合データベースを作成した(写真-2)。



写真-2 標本調査の成果。左 コショウジョウバカマの原資料(KYO)。原発表とは採集日(4日)に若干の違いが認められる。右 外来種ゴマフガヤツリの標本(TNS)。2006年に既に西表島に侵入していた証拠

4. 第3回西表島植物誌編纂委員会

コロナウイルス感染症の蔓延のため、令和5年度に予定されていた西表植物誌編纂委員会は延期となった。琉球大学によるトランセクト調査が令

和4年度末をもって終了し、令和5年にも補足調査が行われたものの、これまでのデータの取りまとめも平行して行われた。令和6年度はこのデータをもとにした原稿の執筆が中心となるが、早急にこれにとりかかる上でも編纂委員会の立ち上げが急務である。

5. 外部評価委員会コメント

野外調査は、初期の計画以上に実行されている。今後、西表島植物誌の編纂のためには編集者の手配が不可欠と思う。出版する西表島植物誌の主な利用対象者は誰なのか、良く吟味する必要がある。それによって、検索表と記載の他に、何をに入れるべきかが決まる。(小山顧問：高知県立牧野植物園顧問)